堀池　雅夫（ほりいけ　まさお）

◎　業績及び経歴

昭和 26 年、静岡県に生まれる。35 歳の時に田辺市に移住し、妻の実家の製煤業を継ぐ。当初は油煙煤を製造していたが、知人から懇願され、松煙墨製作を始める。

松煙墨は、松の煤（松煙）と膠を合わせて作る墨であり、奈良時代には日本で製作されていた。特に紀州松煙墨は、平安時代、熊野詣に訪れた上皇に献上された名墨である。その素材となる松煙の製煤は、山村の貴重な現金収入であり、かつて紀州の山々には多くの「煙屋（えんや）」がいたが、昭和 30 年代になり、製煤業の過酷さや松材の減少、コストの安い鉱油墨の普及により、紀州松煙墨は断絶した。その松煙墨製作を復活させたのが堀池氏である。

古来から松煙は、障子で囲った小部屋に焚窯を設置し、松材を燃やして障子に煤を付着させて採取してきた。氏は障子の代わりに金網を用いつつ、他はすべて自身の調査により復元した伝統的な製煤方法を踏襲し製作する。小さな炎で２週間をかけて 500kg の松材を燃やして採れる煤はわずか 10kg であり、膠と練り合わせて型に入れ、灰の中で乾燥させて墨に仕上げるまで半年以上を要する。製煤から松煙墨の製造までの行程を一貫して行う職人は全国で氏ただ一人である。氏の松煙墨は、独特のにじみと黒の色彩が高く評価され、平成 27 年には岐阜県から清流の国・森の恵み大賞優秀賞を受賞した。

さらに氏は、煤に種々の顔料を加えて膠に練り込み、鮮やかな色を付けた墨を創案した。氏が「彩煙墨」と名付けたその墨は、淡く繊細な色彩で多くの人々に愛用されている。

紀州松煙墨製作の復活は言うまでもなく、彩煙墨の創案などを通して、和歌山が誇る紀州松煙墨を未来に残そうと奮闘する功績は多大である。

職　　種：紀州松煙墨製作

住　　所：和歌山県田辺市

生　　年：昭和26年